犬尽くしのアイロニー

――松浦理英子『犬身』論――

佐藤裕子

序

『犬身』は様々な企みに満ちた作品である。まずそのタイトルから、同音異義語の「献身」という言葉が容易に連想され、続いて「あの人の犬になりたい」という帯の扇情的な文言から読者はまたしても様々な連想を余儀なくされる。さらに、その文言の横にポイントを小さくして「そして、人間では辿り着くことのできない心の深みに飛び込んで行きたい」という文章が続いている。これは「人間では辿り着くこと」ができないが、「犬」にはできる（可能である）いうことで、この時点ですでに作者は〈人間と人間の結び付きの不可能性〉を前提としているということである。

さらに『『親指Pの修行時代』から14年。今、新に切り開かれる魂とセクシュアリティ」「好きな人間に犬を可愛がるように可愛がってもらえれば、天国にいるような心地になるっていうセクシュアリティね」と続くのであるが、人間の男と女でもなく、男性同士、女性同士というのでもない。そもそも人間と人間のセクシュアリティを超えた地点から物語が開始されるというのである。加えて、カバー全面に描かれたふさふさの毛の生えた白黒模様の犬のイラストと相俟って、作品に入る前からタイトル・装丁・帯というパラテクストの果す効果に読者は否応なく巻き込まれて行く仕掛けとなっている。

また、目次に目を移せば、第一章「犬憧」、第二章「犬暁」、第三章「犬愁」、第四章「犬暮」、そして「結尾」と、「憧」「暁」「愁」と韻を踏み、かつ「愁」は「秋」を、「暮」は「慕」を連想させ、さらに「暮れる」という言葉から最期をも予想させ、「結尾」は「尾」で終わるというのである。どこまでも人を食った犬尽くしの

趣向は、物語の内部にも及ぶ。〈人間と人間の結びつきの不可能性〉を前提として、さらに人間と人間のセクシュアリティを超えた地点から開始される物語に、犬尽くしの趣向はどのように絡んでゆくのか。

一　犬尽くしの趣向

犬尽くしの趣向として、まず挙げられるのが作品の主要登場人物「八束房恵」と「玉石梓」の名前であろう。これは明らかに『南総里見八犬伝』の「八房」、「玉梓」を連想させるものとして命名されており、加えて、二人の住む街（「狗児市」）にある「犬啼山」「犬洗川」「犬渡橋」「犬戻橋」「犬咲村」「百犬町」「犬寄神社」、また「狗児市」と同様に「県西部にある」「御手市」「穴掘市」、森林浴ならぬ「犬浴」、「菖蒲湯」ならぬ「犬毛湯」、ローズヒップの学名「犬の薔薇」、そして彼女が久喜洋一と発行する雑誌『犬の眼』、梓の一族が経営する「ホテル乾」、「ソルティ・ドッグ」「ブルドッグ」の他にバー「天狼」のマスター朱尾献が作る「犬の蜜」「犬の蕾」「犬」「犬時雨」「犬の真昼」というカクテルの名前、「天狼」に流れる音楽、並びにミュージシャンの名前、「イヌブナの樹」等、全て「犬」の語が入っており、虚実取り混ぜて、犬尽くしの趣向が凝らされている。

さらに、犬尽くしの趣向は「間テクスト性（インターテクスチュアリティ）」の問題にも及んでいる。「八束房恵」「玉石梓」という名前から連想される『南総里見八犬伝』を皮切りとして、「犬婿入り」の民話に加えて多和田葉子の同名の作品『犬婿入り』がある。さらに『フランダースの犬』の「パトラッシュ」、ジャコメッティの「犬」、ガーネットの『狐になった夫人』、手塚治の『バンパイヤ』、ヴァージニア・ウルフの『フラッシュ』、またイギー・ポップの「I WANNA BE YOUR DOG」、「ブラック・ドッグ」、スライ・アンド・ザ・ファミリー・ストーンの「アンダードッグ」、エリック・サティの「ぶよぶよした前奏曲（犬のための）」、「バウワウ」、「ハウリン・ウルフとハウンド・ドッグ・テイラー」、「丸山応挙の描く仔犬の絵」等、「犬」に関係する古今東西の文学作品・芸術作品、歌手やロック・グループの名前が数多く引用されており、これらは作中で果している効果によって、以下のように大きく五つに分類することが可能であろう。

一つ目は、『南総里見八犬伝』、『犬婿入り』、『フランダースの犬』、イギー・ポップの「I WANNA BE YOUR DOG」、「ブラック・ドッグ」、スライ・アンド・ザ・ファミリー・ストーンの「アンダードッグ」、エリック・サティの「ぶよぶよした前奏曲（犬のための）」、「バウワウ」、「ハウリン・ウルフとハウンド・ドッグ・テイラー」、

「丸山応挙の描く仔犬の絵」等、タイトルあるいは人名の中に「犬」という語が取り入れられているか、「犬」がテーマとなっているもの。

二つ目は、『フランダースの犬』の「パトラッシュ」のように、〈「献身」的に主人に寄り添う犬〉という房恵の願望を表象するもの。

三つ目は、ジャコメッティの「犬」、ガーネットの『狐になった夫人』のように、房恵が抱く〈犬（あるいはイヌ科の動物）に変身したい〉という願望を表象するもの。

四つ目は、引用された物語の内容に関わって『南総里見八犬伝』や多和田葉子の『犬婿入り』のように、異種間のセクシュアリティの問題を取り扱ったもの。

五つ目は、近親相姦の問題を取り扱ったものである。例えば、ヴァージニア・ウルフの『フラッシュ』のように、『フラッシュ』自体は犬の物語なのであるが、ヴァージニア・ウルフ自身に着目すると、異父兄との近親相姦の問題が否応なく連想され、玉石彰・梓兄妹との関係に重なってくるという重層的な構図ともなっている。また「犬」には関係ないが、インターテクストとして重要なのは、宮沢賢治の「永訣の朝」であろう。死んでゆく妹に対する兄の慟哭ともいうべきこの詩を、梓の兄の彰は、フサの言うところの「彰のテーマ」として朗読するのである。

そもそも『南総里見八犬伝』の八房と伏姫の関係は、牡犬が人間の女性を思慕し、その思念によって伏姫が八犬士を孕み、産み落とすという、明らかに人獣相関を連想させる関係であることから、人間の男女間のセクシュアリティの問題にとどまらず、女性同士の同性間、あるいは人間と犬というような種を超えた関係性におけるセクシュアリティの問題が提示されているといえるだろう。

しかも、そればかりではない。房恵の魂に固執し、犬に変身させることを条件に魂を売り渡すことを持ちかける朱尾献は、明らかに『ファウスト』の悪魔メフィストフェレスを連想させる人物である。何故なら、魂に固執するのみならず、房恵（フサ）の前に姿を現す時に狼に変身したように、ファウスト博士の部屋に入る時に、悪魔は犬に姿を変えていたからである。しかも重要なのは、これらの引用の殆どが第一章「犬憧」に集中しているという点である。松浦理英子氏は、まず物語の初めにおいて、入念に物語全体の枠組みをこれらの犬尽くしの引用の数々によって形作ろうとしている。つまり、犬になりたいという八束房恵の変身願望に、犬になって玉石梓に献身的に尽くしたいという願望と、その願望がかなえられた時、牡犬であるフサ（房恵）と人間の女性である梓との間に流れる心の交流は人間同士の愛を超えることができるのか、というテーマを無理な

く読者に提示するための枠組みである。

二　久喜と房恵／朱尾とフサ

〈人間と人間の結び付きの不可能性〉を前提とする『犬身』という物語の中心には、犬になった房恵（フサ）と玉石梓との関係が据えられているが、それ以外に人間同士の愛情の様々なサンプルを示すかのように、八束房恵と久喜洋一、玉石彰・梓兄妹とその両親、玉石彰と妻の佐也子、八束房恵と朱尾献という幾組もの男女関係が描きこまれていることは重要である。何故なら、フサと玉石梓の関係も含めて、そのいずれもが、互いが互いに求め合うことがずれている点で共通しているからである。

例えば、「犬化願望」を抱く八束房恵には、久喜洋一という「最も仲の良い女友達」以上に「長い時間を過ごし」「深い付き合い」を重ねてきた、という男性が存在する。十年にも及ぶ久喜との関係を、房恵は次のように回想している。

学生時代は毎日のように会い、電話をかけ合い、連れ立って映画やコンサートに出かけ、さまざまな事柄を話し合った。最も仲のいい女友達以上に久喜とは長い時間を過した。旅行にまで一緒に行った。決して恋人同士ではなく、まわりのみんなも久喜と房恵のことはきょうだいのようなものと見なしていたし、実際房恵は久喜に恋心など抱いたことはないが、あまりにべったり一緒にいたので、暇な時にふと実験でもするように体を組み合わせたことはある。一度や二度ではない。

今は、肉体関係もなく、倦怠期に入ったカップルのように冷ややかな関係の二人なのであるが、久喜は、房恵が「小学校二年生の時以来約十四年ぶりに」自らの抱く「種同一性障害」「犬化願望」を打ち明けた人物でもある。大学の卒業旅行で久喜と一緒にインドに出かけ、「野良犬と親睦に励む」房恵に「犬馬鹿め。おまえの脳味噌は多分半分くらい犬でできている」と罵る久喜の言葉は、房恵に自らの内に潜む「犬化願望」を再認識させる契機ともなっている。

房恵にしても、自分で思いついた病気だし、笑いを誘う話の種として楽しもうとする気持ちもないではなかったのだけれど、体は人間、魂は犬という「種同一性障害」の概念は房恵の特性を理由づけるのにあまりにも便利だった。犬への愛情と犬化願望だけではなく、人間の誰にも、男にも女にも、恋愛感情や性的欲求を抱かない理由まで説き明かせるのだから。おかげで自分でも自分の特性に納得が行き、居場所がはっきりしたという気がして、安心感を得たばかりではなく、感激に涙ぐみそうにもなったのだった。

そしてこのインド旅行から八年が経ち、三十歳になっても房恵の

自己認識は変化せず、「自分が人間には『馴れ親しんだ感じ』以上の好意を持てなくて、犬に対しての方が情熱的になる」という確信が深まっている、と言うのである。

一方、久喜は房恵との関係をどのように考えていたのであろうか。房恵が犬のフサに変身して、朱尾のバーで久喜と遭遇した折に、久喜は房恵との関係について次のように梓に語っている。

「私は八束に個人的に相当の思い入れがあった、ということですね」（中略）「恋愛感情だか何だか分りません。言えるのは、わたしにとって八束は異性同性を問わず、これまでの生涯で最も心を許し親密になれた人間だったということです。（中略）八束と一緒にいるととりわけ楽でした。文学や映画の趣味も合って会話も面白かったですし、これが男同士だったら、あるいは女同士だったら、いつかそれぞれ異性と結婚して自分の家族をいちばん大切にするようになるんでしょうけど、わたしと八束は幸いにも男と女なので、恋愛感情を抱き合っていようがいまいが、結婚してずっと一緒にいることができる。だからわたしは、われわれが男と女の組み合わせであったことを僥倖と思っていたんです。ところが、八束の方はわたしと結婚する気は全くなかったんですね。あいつは人間よりも犬に興味があったから。」

決して恋人同士ではないにも関わらず、互いの好みや何を求めているかを理解している点においては、他の追随を許さない男女の関係あるいは女性同士の関係というのは、松浦理英子氏が繰り返し問題としてきたテーマでもある。例えば『裏ヴァージョン』では、決して恋人ではないのだが、互いを最も良く知る男女としてマグノリア・ハミルトンとエディを描き、『親指Pの修業時代』ではそれぞれ春志、保という存在がありながら互いに惹かれあう真野一実と映子を描いてきたからである。

久喜に呼ばれ、狗児市に移り住んだ当初は、多くの時間を共にした久喜と房恵であったが、三年が過ぎた現在では、房恵にとって久喜の首の左側にある老廃物の固まりである「粉瘤」を絞ることが「唯一無償のサービス」であり、その匂いを嗅ぐという生々しく、濃密な行為だけが二人を結び付けていると言えるだろう。房恵の心が既に自分から離れていることを自覚しつつ、房恵に甘え仕事も任せきりの久喜に比べ、房恵にとって久喜は、「腋臭の臭い」も「臍のゴマの臭気」も、過ぎ去った二十代の若かった頃の思い出でしかない。

房恵が久喜との関係にも「飽き」、「人間は面倒臭い。犬になりたい」という思いを募らせていたそのような折に、半年前に雑誌『犬の眼』の取材で知り合った二十代の女性陶芸家玉石梓と再会する。

梓と飼い犬のナツとの関係は、房恵にとって「犬との理想的な穏やかで温かい」関係そのもので、「犬との暮らしへの憧れ」を一層かきたてられていたのであるが、ある日、飼い犬をかばって梓が房恵を自転車ごと蹴飛ばした事件を機に、「犬との暮らし」などという綺麗ごとではなく、「犬」そのものになること、しかも「玉石梓の犬になりたい」という欲望が生まれるのである。

この時、怪我をした房恵に、傷の手当てをするように誘ったのがバー〈天狼〉のマスター朱尾献である。朱尾は、一年程前に〈天狼〉の客であった久喜と房恵が喧嘩をしたことも、喧嘩の原因である房恵の「犬化願望」も覚えていて、当時よりもより具体性を帯びた「玉石梓の犬になりたい」という房恵の願望に眼を付け、「房恵の魂と引き換えに、房恵を犬に変身させる」という取り引きを持ちかけるのである。魂と引き換えに犬に変身することを提案する朱尾と房恵のやり取りは、次のようなものであった。

「簡単に言いましょう。わたしがあなたを犬に変え、玉石梓に贈る。あなたは十年から二十年の間、玉石梓の犬として暮らす。犬としての寿命が尽きたら、報酬としてわたしに魂をくれる。どうです？悪い話ではないでしょう？」（中略）「幸福だったらいいけれど、もし予想に反して犬になったのを後悔するような期間だった場合はどうなるの？やっぱりあなたに従属しなくてはいけないの？」「……幸せになれないはずはないでしょう。玉石梓の犬ですよ」狼人間の語勢が少し弱くなったのを聞き逃さず、房恵はいっそう強気に出た。いつの間にか架空の設定に夢中になっているという自覚はあったけれども話を途中ではやめたくはなかった。

ここでは、まだ房恵が朱尾の提案を本気にはしていないこと、朱尾もまた房恵の意向を無視する気持ちはないことが、少し弱くなった「語勢」で理解できるのであるが、房恵はさらに食い下がっている。

「だって、梓さんは男運ないみたいだし友達も少ないっていうし、実は幸薄い人かもしれないでしょ。一人と一匹で二十年間、穏やかで地味な生活を送ることになるんならいいけど、梓さんが結婚してあの横着な男と暮らすことにでもなったら、かなりつらいと思うの」「まあそうですけれど。しかし、あなたが犬である期間中はわたしもまめにケアしますよ。あなたが快適に暮らせるようにね。」「サービスがいいね。でも、わたしよりも梓さんのケアをしてくれる？」「それはわたしではなくてあなたの役割でしょう。可愛い犬にしかできないことを徹底的に実践してください。」

この、朱尾の「可愛い犬にしかできないことを徹底的に実践する」

という言葉に、房恵は感動する。そして「犬になって人間では辿り着くことのできない梓の心の深みに飛び込んで行きたい。会話や性行為に頼るのではなく、犬と人間の関係に特有の、気持ちと気持ちをじかに重ねるような交わりを、梓としたい。」と考えるのだ。そして最終的に、房恵の魂を奪うのは「犬として幸せな生涯をまっとうした場合」に限り、「不幸だった場合」は、「そのまま成仏すること」、さらに犬に変身した後、房恵が梓に「性的欲求を覚えたら、生まれて何日目であろうとも」「犬としての寿命は尽きる」という条件を新たに加えて、契約は成立する。「あなたが犬である期間中はわたしもまめにケアしますよ」という言葉通り、朱尾はフサに献身的に尽くしている。まず「電子手帳型のブック・リーダー」と「ブック・リーダーを立て掛けることのできる書見台」を作り、しかもその台は「猫脚」で「全体に彫り模様が施された」凝ったものである。さらに「フサ向け特別仕様の携帯デジタル・オーディオ・プレイヤーとスピーカー」と、のみならずフサを慰めるために「鉢植えのスミレ」を準備し、さらに梓の「フサがいることがつらくなります」という言葉を聞き、打ちひしがれるフサに、「ブラック・オリーブの眼と櫛切りにしたマンゴーの口のついた雪だるま」を用意し、フサはオリーブとマンゴーを食べることで癒されている。また、彰と梓の性行為の一部始終を見せられ、その後何事もなかったかのように兄にコーヒーを淹れ、夕食まで共にした梓に呆れ、外に出たフサの前に狼に姿を変えた朱尾が現れ、無言のまま傷ついたフサを丘の上の雑木林に誘っている。作品中、最も美しいこの場面において、朱尾はフサが月の光を浴び、「丘の風物の好ましい匂いに包まれ」、細いせせらぎの水で喉を潤し、黄色い小さな花を眺めて、心をほぐしてゆく姿を見守るのである。

結局のところ、フサは人間であった時の房恵の頭脳と意識と思考力を宿したまま、姿形だけ犬になっている訳で、本当の犬ではない。朱尾献も同様で、狼でありながら、人間でもある。しかもあらゆる事柄を全て見通していることから、まさに〈神のような存在〉〈神の如き全知全能の視点を持つ存在〉なのであるが、このあたりから、松浦理英子のファンタジーは俄然活気を帯び、朱尾献は前述したように『ファウスト』の悪魔メフィストフェレスの如く、房恵の魂に固執し、犬に変身した後も、フサと唯一コミュニケーション可能な相手として、フサと梓の関係を見守り続けるのである。

三　フサと梓

結局、房恵が犬になって得たものは、梓との「理想的で穏やかな温かい生活」であり、その生活の中で知り得たものは、彰と梓の近親相姦の事実であった。玉石彰・梓兄妹の近親相姦に関しては、

「家のことには消極的で影の薄いむっつりした」無力な父、「息子のこととなると分別がつかなくなる」過干渉な母、「甘やかされて殿様のように振舞う」兄、「母親と兄の意見を聞いているだけの従順」な妹、母と息子とのいびつな関係、娘に嫉妬する母、そしてそれぞれが共依存の関係にあるという具合に典型的な描かれ方をしている。そこに犬になった房恵（フサ）が関わり、朱尾以外の人間とコミュニケーションを取ることができない房恵（フサ）が、梓に何も伝えられないもどかしさに苦しむという構図が生まれるのである。

作品の後半部、フサは兄にいいように虐待される梓が、諦めの心境から戦うことを決意するまでを見守ることとなるのであるが、それは同時に（血の繋がった肉親への切りたくても切れない絆）を見せ付けられることでもある。例えば「できれば母親とのほどよい頻度での行来を再会したいと梓が願っていること」や、「母を捨てられないのよ」と友人の天谷未澄に告白して、未澄から「暴力をふるう男から離れられない女の口にする科白みたい」と呆れられてもいる。また、兄と母をフサの体調に事寄せて遠ざける事に成功した梓が、クリスマスも過ぎ、年末の慌しさの中で、寂しさを募らせてゆく様を見て、フサは「梓が家族との交流が絶えたのを寂しがっているのだとは考えたくなかった」と考えているし、朱尾のバーを訪れた梓が「母のことも兄のことも、どうしようもなくだめな部分があるとわかってはいても、やっぱり肉親は嫌いになれませんからね」という言葉を発するのを聞き、フサは「遠慮なく嫌いになればいいのに、とむかむかして」もいるのだ。さらには兄との性行為を決定的に拒むことをしない梓に対して、「梓も梓で、彰に恩を着せられているとはいえ性行為はきっぱりと拒絶できないものなんだろうか」と、読者の心情とも重なるフサの遣り切れない思いも描きこまれているのである。

彰の妻の佐也子がブログの中で「昨夜帰宅した夫からは熟れた銀杏のような匂いがした。風俗にでも行ったのか？本人は妹の所に行っていたと言う。34歳の男が29歳の妹の家にしょっちゅう遊びに行くのは（本当だとしたら）何とも気味が悪い」と書いていたように、妻の佐也子は夫から立ちのぼるその匂いによって、彰と梓の関係を疑っている。だとすると、同居する家族には、二人の関係は知られていたと考えるべきであろう。それにも拘らず、無関心を決め込む父親と、息子の機嫌がよければ娘が犠牲になっても構わないと考える母親と、心身ともに虐待され続けて人間というものを信じられなくなった梓の居場所は玉石家にはなかったということだろう。

家族以外では友人の天谷未澄にメールを出す程度の狭い人間関係の中で、梓の心情が梓自身の口から語られることは殆どなく、兄

の彰が自分に都合の良い物語を梓にぶつけるか、あるいはブログに書き散らすことによって、あるいは房恵（フサ）の考えたこと、あるいは朱尾との会話の中で、梓の心情を推測し代弁する形でしか、梓の心情は読者に示されていない。中でも、彰が妹になりすまして近親相姦の事実を語る（騙る）行為は、まさに自分と妹を自己同一化するというオナニズムの典型であり、彰と梓の関係の不毛な背景そのものであるといえるだろう。

最後の戦いを母と兄に挑んだ梓は、兄によってフサが殴り殺されるという事実に直面し、初めて感情を爆発させ、兄を殺害する。フサはその命と引き換えに、梓に魂の自由を与えたということができるだろう。

結　犬尽くしのアイロニー

それにしても、人間同士の関わりではなく、種を超えた犬との交流にこそ、真の魂の交流があるとする作者の視点の、なんとアイロニカルであることか。犬尽くしの趣向にしろ、作品内に鏤められた様々なテクストの果す効果にしろ、作者が「ホモセクシュアルでもヘテロセクシュアルでもない、これは自分でつくったことばだけど、ドッグセクシュアルとでも言うべきなんじゃないかと思う。好きな人間に犬を可愛がるように可愛がってもらえれば、天国にいるような心地になるっていうセクュアリティね」と語る時、その前提となるのは、完全なるディスコミュニケーションであることを忘れてはならない。何故なら、現実において人間は犬の考えていることを類推することはできても、心から理解することはできないし、犬もまた人間の考えていることなど、経験から推測することはできても完全に理解することなどできないからだ。その意味で『犬身』は、漱石の『吾輩は猫である』と似ている。人間から犬になった房恵（フサ）は、人間としての頭脳をそのまま保つように朱尾によってプログラミングされているために、梓の語ることを理解し、書いたものを読むこともできた。『吾輩は猫である』の「猫」も、登場人物たちの語ることを理解し、文字を読むことも出来るのだが、「猫」の考えること・語ることは読者にのみ向けられ、「猫」と人間たちとの間に会話並びに相互理解が成立し得ないために、「猫」は登場人物の一人でありながら、猫以外の、人間の登場人物たちからは孤絶した存在なのである。その点、「フサ」は読者以外に、作中に朱尾という人物が存在するため、孤立はしていないが、肝心の梓とのコミュニケーションは、触れ合うこと以外は、鎖されたままなのである。触れ合うことのみで意志の疎通ができていると錯覚し、犬が何を考えているか分らないまま、己の欲望を投影し、自己満足に陥っている、まさに現代のペット・ブームの底に潜む人間のエゴイズム

をも冷徹に見透かすかのような仕掛けである。

犬との関係を理想とするアイロニーは、家族制度の破綻とともにあらわになった不毛な性の構図を浮き上がらせている。犬尽くしのアイロニーはここにこそ存在するといえるだろう。

（本学教授）